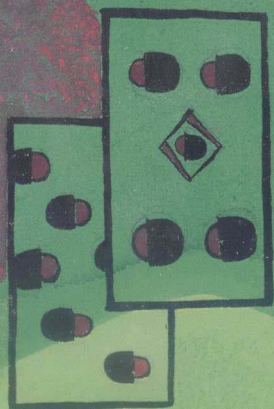
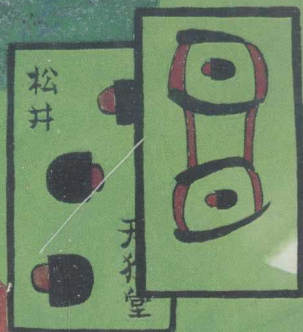


おれは賭場野郎

青山光二

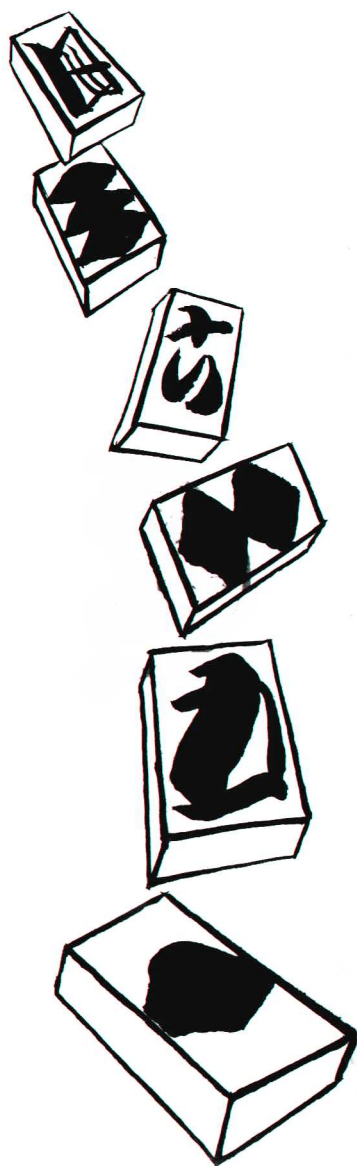


おれは賭場野郎

—— 終りなき賭け ——

青山光二

光風社出版



おれは賭場野郎

—終りなき賭け—

定価 800円

昭和55年3月10日 発行

書籍コード 0093
064601
2265

著 ~~山光二~~ 山光二

発行 ~~深見兵吉~~ 深見兵吉

本文印刷 ~~誠宏印刷~~
カバー印刷 ~~大平吾美爾印刷~~
製本 ~~誠後堂製本~~

発行所 光風社出版

〒112 東京都文京区関口1-32-4

電話(03)204-2441 振替東京8-12913

~~~~~  
落丁・乱丁などの不良本はお取替えいたします。

目

次

第1章 「黄金の腕」と花

7

第2章 流れ者に埒<sup>ねぐら</sup>はない

50

第3章 新宿の夜の底で

88

第4章 血の色に空は灼<sup>や</sup>けて

123

第5章 鏡ある賭場のほとり

160

第6章 闘える男の夜景

239

《えびろおぐ》

239

装  
幀／小  
林  
秀  
美

おれは賭場野郎

——終りなき賭け——



## 第1章 「黄金の腕」と花

### 1

胴師・島岡辰治が、繰りおわった引札を紙下に挿んで、膝前に置くと、  
「はいりました」

「さあ、つけてください」

両脇の合力は、くちぐちに云って張り方をうながす一方、一万円札や千円札を手早く数えて、ま  
えの勝負の決済をつけた。縦二つ折りにした札束が、白い盆布の上をとび交うのだ。五百円は楕円  
形プラスチックの赤札、百円は白の碁石で代用している。が、ひと勝負ごとに、二、三百万円もの  
現ナマが盆を泳ぎまわる、この盛大な賭場では、赤や白のコマの動きなどは目じゃないのだ。

盆布をかこむ二十人ほどの張り手の半数は親分衆、あとの半数は客の旦那衆であった。神戸の蓬  
萊組二代目と静岡の籠屋一家八代目とが兄弟の盃をすることになり、その結縁式なるものが有馬温  
泉の割烹旅館『銀月』の大広間で行なわれた後、おなじ日の夜、結縁祝いの盆が『銀月』の離れ座

敷で、敷かれているのであった。

盆につらなる親分衆というのも、その日の盃固めに取持人や見届人や立合人をつとめた大物を別にすれば、地元蓬萊組傘下の威勢のいい組長クラスがほとんどであった。初代は明治中期の博徒であつたという籠屋一家の八代目は、代賃を一人帯同しただけで静岡から出向いてきており、だからこの開帳は、見ようによっては蓬萊組が総がかりで籠屋の親分を接待しているようでもあつたが、また見方をかえれば、新たに身内となつた東海地区の実力者に対する蓬萊組の示威行為ともとれるのであつた。

祝儀にかこつた遠出の盆に招かれた旦那衆は、金融会社や土建業の社長族、商店主、土地成金とさざまだが、金持ちの博奕好きという点は共通しており、こういう人種がいなければ、由来、賭場というものは成り立たないのである。そして、西日本全域に勢力がおよぶとされる蓬萊組二代目ぐらいになると、ポケットにはいりきらぬほどの札束をかかえた上客を、十人や二十人、よびあつめるのは造作もないことだつた。

上客ちゅうの上客、駒村新助は胴師の斜め前の席で、三枚の張札を盆布に伏せ、配置していた。すると、すぐ隣りに白のパンタロンの足を横坐りに折って坐つた若い女が、ベージュ色のセーターの腕をすつとのぼして、駒村の手許からもう一枚、札を取つた。目数を読み、それを場に伏せ、つこう四枚の張札をならべなおす。

「大張りやな」

大阪ミナミの老舗洋品店主は、ごきげんな表情で云った。

「そう」と女は頷いて、「当分、堅実に行きはった方がよろしやろ」

「お嬢さん、なかなか詳しいですな」

と、血色のいい丸顔に微笑をうかべて、そのとき云ったのは、若い女の隣り、胴師の正面に坐った籠屋一家八代目親分、半沢義助である。でっぶり太った寛濶な押し出しは、どう見ても商家の大旦那といったところで、その点、いっけん大学教授ふうの、ベレーの似合いそうな駒村新助より、はるかに商人タイプだった。胴師の挙措のいちばんよく見える横盆中央の上席へ半沢を据えたのは、主宰者である蓬萊組二代目親分伊勢田茂の礼遇だった。半沢義助に、博奕に詳しいとひやかされた、白のパンタロンの女は、顔を隠すようにして、

「あらあ、恥ずかしいわ」

「球ちゃんの云うこときいてたら、間違いないさかいな」

と駒村新助は、伏せた四枚の張札の中央へ五万円をツケている。

半沢義助は三枚張りのヤマポンの二個所に、五万円ずつを張って、コカ・コーラのコップへ手をのばした。

手本引きの張札は、一から六までの数字を文様化して肉筆で描いた六枚がひと組になっているが、六枚全部を張るのではない。四枚張り、三枚張り、二枚張り、一枚張りのどれかを張り手は選ぶのである。

四枚張りにも、大張り、大中テツボウ、ソーダイウケと、札の置き方や賭金<sup>ス</sup>の付け方によって様式にヴァリエティがあり、どれを採るか、そしていくら張るかは、側師<sup>がわし</sup>の作戦<sup>さくせん</sup>しだいである。要は、いましがた胴師の繰りおえた引札の目数、一から六のうちのどれであるかによって勝負はきまるのだが、アイたへ目数が合致したゝ張札に胴元からツケる、その配当率が、札の位置によって違ふところがミソだった。

丁半やアトサキのように、イチかバチかの勝負でないところが、手本引きの特色であるともいえるが、それだけにルールは複雑をきわめ、そこに尽きせぬ妙味があるというものの、隅から隅まで呑みこむのは、専門博徒といえども容易ではない。

三枚張りには、本線、ヤマボン、六三ピンなど、二枚張りには、ケツタツ、グニ張りがあるが、一枚張りのスイチだけは、玄人はまず手をそめない。仮りに「三」の張札を伏せ、一万円を張ったとする。胴師のあげた引札の目数が「三」であれば、四万六千円の配当がつくのである。はずれれば一万円の損で、つまりスイチだけは、イチかバチかの勝負だ。

（球ちゃんのカンは、ばかにならん。うっかりするとヌカれる）

胴師の島岡辰治は、盆布ごしにわらい掛けてくる瀧崎球子の艶のある視線をはずしながら呟き、洋モクを一本ぬいてくわえた。

球子は、辰治の親分に当る瀧崎謙蔵の一人娘である。女子大生だが、門前の小僧なんとやらで、博奕の道にかけては玄人はだした。その上、出藍<sup>しゅつらん</sup>のほまれとでもいうのか、博奕一途に生きてきた

くせに博奕の下手な父親よりも、どうやら、はるかに勘がいい。且べエの駒村新助などは、博奕コンサルタントとして、球子を引きつけて離さないのだ。

島岡辰治は、煙草の煙を吐きながら、盆のまわりへ、まんべんなく目をくばった。彼の膝前には「辰」の一字を白ヌキにした茶色の紙下と、その向うに、一から六のモク札が六枚、きちっと一列に並んでいた。辰治の紙下は、別染めの日本手拭で代用している。四つ折りにしたのへ引札を挿んで、さらに二つに折るのだ。

紙下に引札を挿んでから、側師が張りおわるのを待って紙下をひらくまでが、胴師の休息のときであり、次の勝負の作戦を立てる時間でもあった。

(二代目はグニ張りの一点ばりやな。一点ばりちゅうのは、どうも神経にさわる。大隅はんは今日には控えめやから、けっきょく、二代目と籠屋と、この二人が難物や。結縁の大御所二人が、肩を並べてかかってきよる感じや)

辰治は呟いた。

手本引きの勝負は、胴師と、盆をかこむ張り手ひとりひとりとの戦いだが、おおぜいの側師をぜんぶ頭において引札を繰るのは、可能なわざではない。高ゴマを張ってくる、それも老練な側師を正面の敵として、勝負するしかなかった。見るからに老練なのは籠屋の半沢義助であり、蓬萊組傘下、大隅組の組長も手だれの博徒として知られていたが、資金が充分でないのか、今日は、無難な本線や大張りに、こまかく張って付合っているといった具合だ。

グニ張りというのは、縦に二枚ならべて張札を伏せ、二枚の中間に現ナマを張るのだ。上の札がウカれば二・六倍、下の札がウカれば賭金と同額の配当がある。伊勢田茂は、勝負ごとに札を入れかえるだけで、グニ張りの一点ばりだった。そして二十万、三十万と大きく張る。豪胆とも不精とも見える張り方だったが、実は二代目は、ほかの張り方をしようにも、グニ張りとスイチしか知らないのだ。博徒の大親分には、えてしてこういう博奕オンチがいるものらしい。

（瀧崎の親父は、むりして高ゴマ張ってはスベっとる。家で気儘いっぱいに暮してゐるから、盆へ坐ったとき、融通がきかんのや）

蓬萊組二代目の伊勢田茂とならんで、盆の奥の縦盆に坐っている瀧崎謙蔵の筋張った、色の黒い顔を眺めて、辰治は思った。瀧崎組は蓬萊組傘下の渺たる一家だ。謙蔵は二代目と、いちおう兄弟の盃をしているが、分割りは四分六で、乾分みたいなものだった。今日、二代目と五分の盃固めをした籠屋一家八代目とは、天と地ほど、貫禄の違いがある。

瀧崎と二代目とのあいだに、瀧崎のうしろに控えるようにして、小柄な、ひとこしの小紋を今ふうの粹に着こなした三十四、五の女が坐っていた。瀧崎の二号の雅江である。二代目は、気になるらしく、グニ張りに二十万円を、さっさと張ったあとの手持ちぶさに、

「瀧崎の兄弟」と云った。「お前、隅におけんのう。こんな美人を、どこへ隠しとった」

「隠しとらしまへんがな。新開地で、小っこい店やらしてまんねや。寄ったとおくなはれ」  
「ほう、寄って口説いてもええのんか、おい」

「殺生なこと云いなはん、二代目！」と、盆のコーナーを隔てた席から声をかけたのは、これも二代目の舎弟に当る大隅組の組長大隅喜市である。「瀧崎はん困ってまっせえ、なあ、お嬢ちゃん？」

矛先を向けられて、瀧崎球子は、首をすくめて見せた。雅江は、むろん公認の二号で、本妻の娘の球子とは友達みたいなものだ。その雅江は、割りの大きい目をみはったまま、ひっそりと声も立てずにわらっていた。

「よろしか」

「よろしおまっか」

頃合いを見て、二人の合力が云った。辰治は、煙草を灰皿ににじり棄てた手を、ズボンの膝に置いた。親分衆の一人が、

「まだまだ」

まだ張り方をきめかねている客があるぞという意味の発言だった。二十人もの張り手それぞれの思わくをこめた札とズクが出そろうには、やはり二、三分の時間はかかるようだった。いや、五分もかかることがあるのは、互いに冗談口をたたきあったり、飲み食いをしながら張って行く、遊びの気分が、大がかりな手本引きの賭場にはつきものだからであった。

障子をとりはらった広い縁側には、バッテラ鰯、大阪鰯、ジュース、サイダー、果物の罐詰、大福・和菓子、外国煙草と、ずらっと中店が出ていて、ガムや飴玉からドリンク剤までそろっている

のだ。客の注文をきいて、中店とのあいだを動きまわるのはクスボリの若い衆の役目だ。千円札でバッテリーを買わせても釣銭をとる客はいないから、三下さんしたの若い衆には、いい小遣稼ぎになった。二度三度とお茶をかえに走れば、また心付けが来る。

「早いとこ張っとくはなはれや」

「そこ、つけてください」

せき立てられて、土地成金が、二十万円の上へ、伏せた張札を一枚、叩きつけるようにぽんと置いた。スイチである。二十人それぞれに、二枚張りもあれば、三枚張りも四枚張りもあったが、籠屋の親分のように変幻自在な手を打ってくるテキはいないと、胴師辰治は思った。

「よろしな、はい、できました」

「こっちもできた」

二人の合力は、盆の右半分と左半分を分担して宰領さいりょうしているのだ。一人が、いちだんと氣迫をこめた、抑えた声で、

「さあ行こ、勝負！」

辰治の白い手がのびて、六枚ならんだモク札の列から「五」を拾い、右端へ送る。つづけて紙下をひらくと、現われた引札の目数も「五」であった。合力が、

「五」

と読みあげるまでもなく、土地成金は、スイチに張った札を起こして放りだし、伊勢田茂も、二